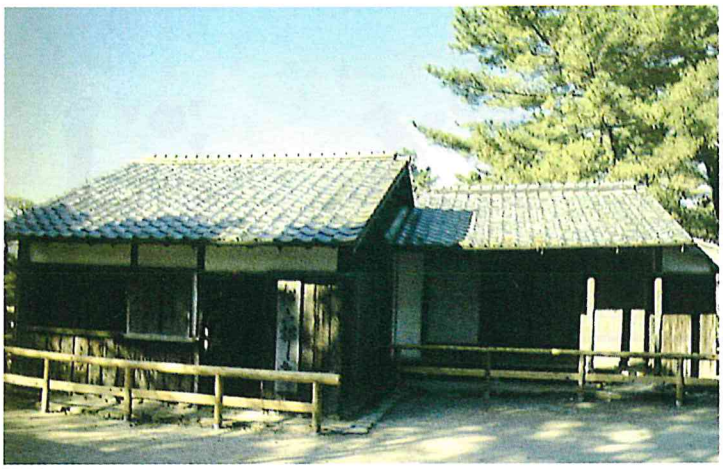
松陰先生の主な門下生たち



維新前に逝去した門下生

赤祢武人（一八三八～一八六六）

天応九年柱島地下医の松崎家に生まれ、安政三年十九歳の時には松下村塾に学んだ。翌四年赤祢家の養子となる。松陰から伏見の獄にいる梅田雲浜の救出策を受けるが未遂に終わる。文久三年奇兵隊第三代総督となったが、慶応二年藩命により処刑。享年二十九。

阿座上正蔵（一八四六～一八六四）

弘化三年萩藩士の家の出生、生家は杉家の北隣。安政四年十二歳で松陰の兵学門下生、塾生となり、兵学と漢学を学ぶ。安永六年松陰東送の際、送別の詩を詠む。元治元年禁門の変で自刃。享年十九。

有吉熊次郎（一八四二～一八六四）

天保十三年萩藩士の家の出生、安政五年十七歳で松下村塾に入塾。その年、間部老中要撃策に血盟。松陰投獄に抗議して謹慎となる。文久二年英国公使館を焼き、文久三年久坂玄瑞と共に八幡隊を組織した。元治元年禁門の変で自刃。享年二十三。

飯田正伯（一八二五～一八六二）

文政八年萩藩医の家の出生。安政五年三十四歳で松下村塾に入塾。村塾での銃陣訓練のリーダー。安政六年東送の松陰のため、同志と共に周旋に努め、処刑後遺骸を回向院に葬った。万延元年軍用金調達のため幕吏に捕縛され、文久二年獄死。享年三十八。

伊藤伝之輔（生没年不）

萩藩軽卒の家の出生。安政五年頃村塾に出入り。同年六月松陰の進言により藩命を受け、京都に出て情勢を偵察。大原卿西下策に関係して、自宅で謹慎、安政六年から万延元年まで投獄された。慶応初年奇兵隊に入り、北越戦争に参加。

入江九一（一八三七～一八六四）

天保八年萩藩軽率の家の出生。安政五年二二歳で入塾。同年、間部老中要撃策に血盟し、松陰再獄に抗議し謹慎となる。大原卿西下策、伏見要駕策などで、松陰を支え続けた。奇兵隊創設に尽力。元治元年禁門の変で戦死。享年二十八。

大谷茂樹（一八三八～一八六五）

天応九年萩藩永代家老益田氏の家臣の家の出生。須佐育英館に学び、育英館と松下村塾の交流から、安政五年二一歳で入塾。元治元年禁門の変に関係して謹慎。慶応元年脱走し、回天軍総督となり上京を図るも、恭順派に捕らえられ切腹。享年二十八

金子重輔（重之輔）（一八三一～一八五五）

天保二年阿武郡渋木村に生まれ、金子家を継ぎ足軽となる。嘉永六年二十三歳の時、江戸の烏山新三郎の塾で松陰と出会う。安政元年松陰と共に下田踏海を決行も失敗し投獄される。安政二年岩倉獄で病死。松陰は『冤魂慰草』を編纂し、その死を悼んだ。享年二十五

許道（生没年不）

僧侶。安政四年九月ごろ松下村塾で学んでいた。前後の経歴は不明。

久坂玄瑞（一八四〇～一八六四）

天保十一年萩藩医の家に生まれ、幼児より藩校明倫館で学ぶ。十四歳で父母・兄亡き後、家督を継ぐ。九州遊歴時に宮部鼎蔵から松陰を知り、安政四年十八歳で入塾、同年十二月松陰の妹・文と結婚。勉学に励み、松陰の教育事業を助ける。安永五年江戸、京都で尊皇攘夷活動を展開、松陰没後は塾生の指導者として遺志を継ぐ。元治元年禁門の変で自刃。享年二十五

佐々木謙蔵（一八三八～？）

天保九年萩藩士の家に生まれる。佐々木三兄弟の次男で、安政三年十九歳で松下村塾に入った。松下村塾周辺での銃陣訓練のリーダー格であった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。松陰処刑後は、尊皇攘夷活動のため各地を回り、奔走した。

杉山松介（一八三八～一八六四）

天保九年萩藩軽卒の家に生まれた。安政五年二十一歳で松下村塾に入る。同年六月松陰の進言により、藩命を受け、京都に出て情勢を偵察した。間部老中要撃策に血盟した。元治元年池田屋で新撰組と戦い没した。享年二十七。

瀬能百合熊（生没年不詳）

萩藩士・瀬能吉次郎の子として生まれた。父・吉次郎は松陰の父・杉百合之助と友人で、新道の杉家はも

と瀬能家の借家である。百合熊は阿座上正蔵などと共に、安政四年松陰の兵学門下生及び塾生となった。

高須滝之允（一八三五～一八六六）

天保六年萩藩士の家に生まれた。安政三年松陰が出獄してからすぐに行われた幽囚室の『孟子』の講義に参加し、二十二歳で松陰の兵学門下生及び塾生となった。精鋭隊に入り国事に奔走していたが、慶応二年武器弾薬の輸送中、船から落ちて溺死した。享年三十二。

高杉晋作（一八三九～一八六七）

天保十年萩藩士の家に生まれた。幼少より藩校明倫館で学び、安政四年十九歳で松下村塾に入り、久坂玄瑞と共に村塾の双璧となった。松陰東送後は周旋に努め、処刑後は教えを忠実に実践。文久二年藩命により上海に渡り、中国の植民地化を見るや、帰国後藩論を尊皇攘夷に転換すべく尽力した。文久三年には奇兵隊を組織して恭順派を打倒し四境戦争（第二次長州征伐）で奮戦し、藩を倒幕に導いた。慶応三年病死。享年二十九。

高橋藤之進（一八四六～一八六五）

弘化三年萩藩士の家に生まれた。野山獄司・福川犀之助の弟である。安政二年十歳で獄中の松陰に教えを乞い、出獄後も指導を受けた。その後遊撃隊の書記兼参謀となったが、慶応元年に没した。享年二十。

玉木彦介（一八四一～一八六五）

天保十二年萩藩士・玉木文之進の子として生まれた。松陰の従弟。「士規七則」は彦介のために書かれた。安政三年十六歳で幽囚室の松陰を訪れて学んだ。その後頻繁に松陰のもとに出入りしていた。元治元年御楯隊に入った。慶応元年高杉晋作等の藩論統一の戦いに参加し、絵堂の戦で重傷を負って没する。享年二十五。

寺島忠三郎（作間忠三郎）（一八四三～一八六四）

萩藩士の家の出生、作間家の養子になるが後に復籍。十六歳で入塾。間部老中要撃策に血盟、松陰再投獄に抗議して謹慎。文久二年松陰慰霊祭祭主。長井雅楽要撃事件、横浜公使館焼き払い事件に加わるなど国事に奔走。元治元年禁門の変で久坂玄瑞と共に自刃。

時山直八（一八三八～一八六八）

萩藩士の家の出生。初め松陰兵学門下生、二十一歳で入塾。元治元年奇兵隊に入り、参謀となる。戊辰戦争の越後朝日山（小千谷市）の戦いで戦死。

中谷正亮（一八三一～一八六二）

萩藩士の家の出生。松陰と共に江戸に遊学。安政三年時々幽囚室の松陰を訪ねて兄事。高杉晋作や久坂玄瑞などを松陰に紹介。「一燈銭申合」に参加し活躍。文久二年藩命を受け、江戸に赴くが、病気で急逝。松陰に「小生　大知己なり」と言わせ、「自ら妙、山口にて一世界をなせかし。～天下の大事を論ずるに足らず」（松陰三十歳）と残念がらせた。

弘　勝之助（一八三七～一八六四）

萩藩士の家の出生。一八五八年入塾。七卿落ちを護衛。禁門の変で自刃。

馬島甫仙（誠一郎）（一八四四～一八七一）

萩藩医の家の出生。十四歳で入塾。松陰は再投獄に当たり、「馬島に与ふ」の中で、「村塾の主持、僕、実に足下に委す。足下、果たして能く之に任ずるか」と松陰は呼びかけて、甫仙を村塾の後継者に擬している。奇兵隊書記役。一八六五年から五年間、村塾での指導と松陰の遺稿の整理に当たった。東京で急逝。

松浦松洞（亀太郎・無窮）（一八三七～一八六二）

魚商家の出生。幼時から絵事に秀でる。二十歳で入塾。松陰東送の際にその肖像画を描いた。その後、尊皇攘夷運動に従う。長井雅楽の公武合体論に反対し、京都粟田山で自刃。松陰（三十歳）は「無窮は吾れを知る者、豈に特だ吾が貌を写すのみならんや。」と「図賛の跋を作る」の中で述べている。

吉田稔麿（栄太郎・秀実・無逸）（一八四一～一八六四）

萩藩軽率の家の出生。久保氏の松下村塾で学んだ後、十六歳で増野徳民に伴われて幽囚室の松陰に入門し、最も期待された。間部老中要撃策に血盟、その後松陰の再投獄に抗議し謹慎を命じられた。そのことで、親族に迫られ松陰との交わりを絶つ。このとき、松陰は「吾が畢生の大過、何を以てこれにくわへん。無逸の心、終始一の如し、これを天地に稟け、これを父母に受く、初めより師友学問を借らざるなり。～遂に忍んで吾を棄てしなり。嗚呼、吾悔いを知る、無逸、其れ吾を恕せよ」（一八五九年「無逸に与ふ」）と悔恨の情を書き送っている。その後一八六二年に活動を再開し、松陰の期待に応えた。一八六四年池田屋事件で重傷を負い、自刃。

維新後に官吏で活躍した門下生

天野御民（一八四一～一九〇二）

天保十二年萩藩士の家に生まれた。安政四年十七歳で松下村塾に入った。その後奇兵隊に入り、四境戦争で活躍した。明治以降司法官となり、獄則の起草をした。退官後は、毛利家で維新史料を編纂した。『松

下村塾零話』を著した。明治三十五年没　享年六十二。

飯田吉次郎（一八四七～一九三二）

弘化四年萩藩士の家に生まれた。安政四年十一歳で松陰の兵学門下生及び塾生になる。慶応元年奇兵隊に入り、慶応三年藩命を受けてオランダに留学した。帰国後工部省に入り鉄道建設に尽力し、京都、大津間の逢坂山トンネルを完成させた。大正二年没。享年七十七。

伊藤博文（一八四一～一九〇九）

百姓林十蔵の家に誕生。安政元年父の養子先の伊藤と改姓。安政四年十七歳で入塾。松陰の遺骸を回向院に葬る。文久三年ロンドン留学。翌年下関事件を聞き帰国。明治以降、岩倉使節団副使。初代内閣総理大臣。憲法草案起草。明治四二年ハルビン駅で暗殺された。享年六十九。

岡部繁之輔（一八四一～一九一九）

天保十三年萩藩士の家に生まれた。来原良蔵の甥で、富太郎の弟である。安政三年十五歳で松下村塾に入った。安政六年松陰東送の際、送別の詩を詠んだ。慶応三年千城隊世話役として上京した。明治以降は工部省に入った。大正八年没した。享年七十八。

岡部富太郎（一八四〇～一八九五）

天保十一年萩藩士の家に誕生。安政四年十八歳で松下村塾に入った。須佐育英館との交流に参加。安政五年松陰再投獄に抗議し謹慎。文久元年「一燈銭申合」に参加。文久二年以降大組隊、勇力隊、千城隊で活躍。明治後諸県に在官。明治二十八年没。享年五十六。

荻野時行（一八三五～一八八四）

天保六年萩藩永代家老益田家の家臣の家に生まれ、須佐育英館で学ぶ。安政五年二十四歳で松下村塾に入り、育英館と村塾の提携に尽力。のち佐々木家養子。元治元年禁門の変で参謀。明治以降、山口明倫館、京都師範学校で教鞭をとる。明治十七年没。享年五十一。

尾寺新之丞（一八三三～一九〇一）

天保四年萩藩士の家に生まれた。嘉永六年松陰の兵学門下生。安政四年二十五歳で村塾に入った。安政六年東送された松陰のために周旋。松陰処刑後の埋葬に尽力。慶応元年奇兵隊で活躍。維新後司法省、文部省に入った。のち伊勢神宮で奉仕した。明治三十四没。享年六十九。

木戸孝允（桂小五郎）（一八三三～一八七七）

松陰の兵学門下だが、松下村塾生ではない。天保四年萩藩医の和田家に誕生。天保十一年桂家の養子。松陰の遺骸を回向院に葬る。その後奉勅攘夷に奔走し藩主から木戸姓を賜る。薩長同盟の密約を結び明治以降要職に就く。維新三傑の一人。明治十年病死。享年四十五。

木梨平之進（一八四〇～一九〇〇）

天保十一年萩藩士の家に生まれ、安政五年十九歳で松下村塾に入る。明治三年から翌四年まで伊藤博文等と共に渡米し、財政を研究した。帰国後、士族授産事業の一環として計画された第百十国立銀行（現山口銀行）の創立に携わった。後に第三代頭取を務め、在職中明治三十年に没した。享年六十一。

河北義次郎（一八四三～一八九〇）

天保十四年萩藩士の家に生まれた。安政五年十六歳で松下村塾に入った。同年松陰は「河北生を示す」を詩作し励ましている。慶応三年藩命で米国・英国に留学した。明治以降は軍人、外交官として活躍した。明治二十三年赴任先のソウルで没した。享年四十五。

国司仙吉（一八六四～一九一五）

弘化三年萩藩士の家に生まれた。安政四年十二歳で松陰の兵学門下生となり、次いで松下村塾で学んだ。明治以降秋田県令になった。大正三年に没す。享年七十。

久保清太郎（一八三二～一八七八）

天保三年萩藩士の家に生まれた。久保家は松陰の養母久満の養家で、清太郎は嘉永元年十七歳で松陰の兵学門下生となる。安政二年江戸在中、松陰の旧友と交流し、松陰のために種々の便を図った。安政四年帰国し、松陰主宰の松下村塾実現に努力、自らも指導に当たった。維新後は、三重県令などを努めた。明治十一年没。享年四十七。

倉橋直之輔（一八四〇～?）

天保十一年萩藩軽卒の家に生まれた。安政三年十七歳で幽囚室の松陰の門下生となった。安政五年野山獄に運ばれる松陰駕籠に付き従ったが、その後塾との交流が途絶えた。明治以降は官職に就いた。

黒瀬真市郎（一八三〇～一九〇八）

天保元年萩藩士の家に生まれた。安政五年二十九歳で松下村塾に入る。その後奇兵隊等に入り、国事に奔走した。明治以降は中関村（防府市）村会議員を務めるなど、地方の有力者として活躍した。明治四十一年に没した。享年七十九。

河内紀令（?～一八七一）

萩藩士の堅田家家老の家に生まれた。安政五年松下村塾に入った。その際、青年二十六人を引き入れて銃陣の練習を請うた代表である。間部老中要撃策に血盟した。松陰再投獄の後、元治元年河内は隠居を命じられた。明治四年没した。

溝三郎（一八四四～?）

弘化元年萩藩商家の家に生まれた。吉田稔麿に伴われて松下村塾に来た。「無頼」の三少年の一人、松陰はしいて拒絶せず、安政四年十四歳で入塾した。

駒井政五郎（一八四一～一八六九）

天保十二年萩藩士の家に生まれた。安政四年十七歳で松陰の兵学門下生となり、松下村塾で学ぶ。元治元年二十四歳で八幡隊の隊長となり、後御楯隊の隊長となって、四境戦争（第二次長州征伐）で活躍した。明治二年北海道で榎本軍と戦い、二股金山において戦死。享年二十九。

境二郎（一八三六～一九〇〇）

天保七年萩藩士の斎藤家に生まれ、後に境家の養子となった。嘉永三年十五歳で松陰の兵学門下生となり、安政四年二十二歳で松下村塾に学んだ。慶応元年萩藩尊攘事跡の編集局員となる。維新後に島根県令を努めた。晩年、松下村塾の保存の必要性を痛感して保存会を設立し、塾舎を補修した。明治三十三年没。享年六十五。

佐々木梅三郎（一八四〇～?）

天保十一年萩藩士の家に生まれた。佐々木三兄弟（謙藏、亀之助、梅三郎）の三男で、松陰が安政元年九月から萩の野山獄に囚獄生活となっていたが、安政二年十六歳で幽囚室の松陰門下生となった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。明治二十一年頃北海道に移住した。

佐々木亀之助（一八三五～一九一四）

天保六年萩藩士の家に生まれた。佐々木三兄弟の長男で嘉永元年十四歳にして、松陰の兵学門下生となった。須佐（萩市）育英館との交流に参加した。文久三年義勇隊、元治元年南園隊を率いて、国事に尽くした。明治二十一年頃、北海道に移住した。享年八十。

品川弥二郎（一八四三～一九〇〇）

天保十四年萩藩軽卒の家に生まれた。安政四年十五歳で松下村塾に入る。翌五年間部老中要撃策に血盟し、松陰再投獄には抗議して家囚となる。松陰没後は国事に奔走した。明治三年から八年までイギリス、ドイツに滞在した後、内務大臣等明治政府の要職を歴任し、信用組合の普及に努め、尊攘堂の建立（京都高倉）など、松陰の精神を広く知らしめることに尽力した。明治三十三年没。享年五十八。

滝弥太郎（一八四二～一九〇六）

天保十三年萩藩士の家に生まれた。安政五年十六歳で松下村塾に入った。文久二年「攘夷血盟」に加わり、翌三年高杉晋作の後を受けて、河上弥一と共に奇兵隊総督となった。維新後は岡山地方裁判所長となった。明治三十九年没す。享年六十五。

竹下琢磨（一八三一～?）

天保二年萩藩士堅田家の家臣の家に生まれた。河内紀令に連れられて安政五年二十八歳の時、松下村塾で銃創訓練をした。その後十数日寄宿して松陰に学んだ。慶応三年長崎へ西洋兵術を学ぶために派遣されたが、軍務には就いていない。明治六年都濃郡第三十三小学区戸田小学が設立され、初代校長に就いた。

野村　靖（和作）（一八四二～一九〇九）

萩藩軽率の家の出生。十六歳で入塾。安政六年、伏見要駕策に失敗し、兄の入江九一と岩倉獄に入獄。万延元年釈放され、尊皇攘夷運動に奔走。明治四～六年、岩倉使節団に随行して欧米諸国を視察。その後、神奈川県令、内務大臣、逓信大臣等要職を歴任。松陰の顕彰にも尽くした。明治四十二年死去。松陰から「和作は年少心元なく候へども亦鋭果（鋭敏果敢）、愛すべき者に候」（松陰二十九歳）と評されている。

福原又四郎（利実・去華）（一八四一～一九一〇）

萩藩士家の出生。来原良蔵の甥。十八歳で入塾。間部老中要撃策に血盟。松陰東送後は久坂玄瑞に受指導。長井雅楽と親戚のため長井切腹の介錯をした。北越戦争に干城隊参謀として従軍。維新後は裁判所に勤務。「又四の人物は沈重簡黙、自ら能く華を去り実に就く者」と名前選定（去華）の理由を松陰（三十歳）は記している。

前原一誠（佐世八十郎・彦太郎）（一八三四～一八七六）

萩藩士の家の出生。二十三歳で入塾。間部老中要撃策に血盟。長崎遊学後、藩の西洋学問所に在学。七卿御用掛。四境戦争では小倉藩との折衝に当たる。一八六九年越後府判事、同年参議・兵部大輔となり軍政の確立に尽力するも政府と意見不一致。翌年帰萩。維新政府に対する不満などから、一八七六年十月奥平謙輔等と萩に挙兵、県庁を襲って中央に出ようとしたが政府軍に平定され、萩で処刑された（萩の乱）。「八十は勇あり智あり、誠実人に過ぐ」また「佐世が相替らず誠実の武士」と松陰（三十歳）は評している。

正木退蔵（一八四六～一八九六）

萩藩士の家の出生。十三歳で入塾。恭順派排撃運動に参加。一八七一年英国留学、一旦帰国し一八七六年英国再留学し、文豪スティブンソンに松陰の事蹟を語ったところ、『吉田寅次郎』を著す。一八八一年帰国後、東京職工学校長、さらに外務省入省。一八九一

年ハワイ総領事。二年後官界を退く。

松本　鼎（提山）（一八三九～一九〇七）

農家の出生。幼くして仏道に入門。十九歳で入塾。松陰再投獄に際し、野山獄まで見送る。その後還俗し、禁門の変・四境戦争に従軍。維新後は和歌山県令などを歴任し、元老院議官・貴族院議員。

山縣有朋（小助・狂介）（一八三八～一九二二）

萩藩軽率の家の出生。藩命により伊藤博文等と京都の情勢を偵察。久坂玄瑞の紹介により、二十一歳で入塾。一八六五年、奇兵隊軍監となる。戊辰戦争では越後・会津方面で参謀として活躍。維新後、欧州の兵制を視察し、日本近代軍政の基礎を築く。明治二十二年総理大臣。明治～大正期に元老として権勢を奮った。

山田顕義（市之允）（一八四四～一八九二）

萩藩士の家の出生。十五歳で入塾。禁門の変・戊辰戦争等を戦う。一八七二年、岩倉使節団に随行して欧米諸国を視察。一八七八十年、西南戦争に参加し、陸軍中将。一八八六年、司法大臣。なお、日本大学及び國學院大學の創立者。

横山重五郎（幾太）（一八四一～一九〇六）

萩藩士の家の出生。十七歳で入塾。後に志士を自宅に集め、勉強会を開き、松陰に喜ばれる。維新後は教師や大津郡郡長等を務めた。

維新後に民間で活躍した門下生

大賀春哉（一八二七～一八八四）

文久十年酒屋の家に生まれた。安政四年三十一歳で松下村塾に入った。安政五年松陰から情報収集を託され、岩国に赴いた。元治元年奇兵隊に入り、国事に奔走した。維新後は大阪で鎮台御用商人となった。明治十七年没した。享年五十八。

岡仙吉（生没年不詳）

萩藩軽卒の家に生まれた。安政五年松下村塾に入り、藩命を受けて京都で情勢を探った。入江九一と親しく、投獄された入江らの便宜を図った。文久三年京都で活躍し、慶応の頃は奇兵隊にいた。明治二十二年松陰の贈位を祝う歌を作る。その後のことは不明である。

小野為八（一八二九～一九〇七）

萩藩御雇医の家に誕生。天保十五年松陰の兵学門下。長崎で洋式砲術や写真術を学び、安政五年三十歳で松下村塾生。地雷火を製造し間部老中要撃策に血盟したとされる。のち奇兵隊砲隊長。明治二十二年神道黒住教教導職。明治四十年没。享年七十九。

観界（一八四三～一九二五）

天保十四年農民の家に生まれた。安政五年十六歳の時、松下村塾に入った。文久三年岩国の正蓮寺に入り、翌元治元年同寺の十三世住職となった。四境戦争の際は、周辺寺院と協力して大砲隊を組織して活躍した。大正十四年没した。享年八十四。

富樫文周（一八四一～一八八七）

芸州の医師の家の出生。十八歳で入塾。六か月間在塾。唯一の藩外塾生。医師としての道を歩み、晩年は萩市に移り住んだ。

中谷茂十郎（一八三九～?）

萩藩士の家の出生。中谷正亮の甥。二十歳時、塾で学ぶ。維新後明倫館で兵学を教授。

福川犀之助（一八三四～一八八五）

萩藩士の家の出生。安政元年松陰の野山獄入獄時の司獄の役人。松陰を尊敬し、弟子となる。野山獄で松陰が教育行為ができたのは犀之助の計らいによる。そして「福堂策」が発案される。松陰江戸東送の前夜、犀之助は独断で杉家に帰らせたが、そのことで職務遠慮を申しつけられた。一八七三年ごろまで塾を開いていた。松陰（二十六歳）は「獄司福川氏余に従ひて業を請ふ。余其の懇篤を愛し、傾倒して遺すことなし」と書き残す。

増野徳民（無咎）（一八四二～一八七七）

山代（岩国市本郷）の地下医家の出生。十六歳で入塾、寄宿生、松陰の身の回りの世話などを担当。最も長く松陰に師事。三年ほどで村塾を去り、しばらく音信不通。文久二年久坂玄瑞に再会し、国事に奔走するも、実家に連れ戻される。維新後は郷里で一医師として生涯を終えた。「徳民は縝密にして書を読み、精苦人に絶す」と松陰（二十八歳）は評し、「無咎足下、飄然たる山代の一医生、乃ち来りて吾が社に入り、王事を周旋す、始終一節、奇男子なるかな」と松陰（三十歳）は記す。

馬島春海（一八四一～一九〇五）

大野毛利家の医家に出生。十七歳入塾。一八六三～四年の間、萩で晩成堂（塾）を開設。後上京。

山根孝仲（一八二三～一八九八）

医家の出生。藩医・山根文季の養子。三十六歳の入塾で最年長塾生。会津攻略戦で敵・味方の別なく治療。後に萩で眼科医を開き、高評判

渡辺蒿蔵（天野清三郎）（一八四三～一九三九）

萩藩士の家の出生。天野家の養子となるが、後に渡辺家に復す。十五歳で入塾。奇兵隊創設に関わるも、一八六七年英国に留学し造船技術を研究。帰国後、長崎造船所を設立、日本近代造船界に貢献。晩年は、松下村塾生最後の生存者として松陰の思い出を語り伝え、九十六歳で没した。